

# 沖繩勤務の回顧(9)

大東 信祐 陸自57

この「沖繩勤務の回顧」は防大1期生会の『会報』に沖繩戦史の紹介を含む文章を寄稿したのを契機に、沖繩での勤務を回想し、思い出した事項を書き留めたものである。

編集委員会の後押しを得て、掲載していただいたが、今回で終了する。なお、25年前の記憶に基づいており、誤りについてはご容赦願いたい。

## ネオン街

沖繩には来訪者が多い。陸幕等から旧知の人が尋ねてくることもある。部隊へ来訪後、夕食を共にする機会もあるが、私は相手が宿泊するホテルと一緒に夕食をとることが多かった。

夕刻まで部隊で過ごした訪問客がホテルに入り、入浴してさっぱりした後夕食をとるスケジュールを組むので、時間的には午後7時頃となる。夕食後、街に出かけて見ても午後9時頃であり、沖繩では店は早番の女性が掃除をしているのが関の山で、ママさんが店に顔を出すのはまだ後になる。これは地元の人々の生活時間帯に合わ

せている慣習である。すなわち、土地の方々には勤務が終わり、帰宅してシャワーを浴び、夕食を済ませて一息ついてからネオン街に繰り出すのが常態であり、これにネオン街の営業時間を合わせているのである。

営業開始が遅ければ、終業も当然遅くなる。特に沖繩には電車がなから最終電車までに終わり、従業員を帰らさなければならぬという観念はない。いずれにしる帰宅は当然タクシーになる。夜24時を過ぎた頃、「明日の行事があるので今日はこれぐらいで」と帰ろうとすると、ママが飛んで来て「うちの女の子が何か失礼なことをしましたか。何故こんなに早くお帰りになるのですか」と詰め寄られる。それでも帰ろうとすると、「ヤマトからのお客さんをホテル行きのタクシーに乗せたら大東さんは帰ってきてください」と迫られる。「郷に入っては郷に従え」とはいうものの、そこまで付き合っただけで身体が持たないので「御免」と言っただけで退散することとなる。

## 日本で一番人口の多い村

まだ米軍の統治下にあった時代、甲子園の高校野球に戦後始めて参加できたのが豊見城(トミシロ)高校であった。この高校は豊見城「村」にある。昭和の末期、豊見城村は人口4・5

万人、全国で最も人口の多い「村」であった。

地方自治体で一般に「市」は人口5万人以上と言うことであったが、特例として3万人レベルで市となったものもあり、その後の人口変動によりより人口が少なくなっている「市」もあった。そこで豊見城村は「町」を経ることなく一挙に「市」と名乗ることを画策し、平成の大合併を機に他の町村と合併することなく一挙に「豊見城市」となり、読み方も古来の「トミグスク」に改めた。

## 八重山の戦争

沖繩県内でも八重山諸島では地上戦がなかったため、戦争中の事柄は余り知られていない。沖繩の戦闘においては、空母を基幹とする英国の機動部隊も攻撃に参加しており、主として石垣、宮古島の攻撃や、台湾と沖繩の遮断に運用されているのもあまり知られていない特異事項であろう。

戦後間もなく戦没学徒兵の手記として『きけわだつみのこえ』と言う本が出版され、大きな反響を呼び同名の映画も作製された。その後、紆余曲折を経て岩波文庫に収録されている。(岩波文庫に収録されるものは、古典的な価値が認められたものであるとの認識であったようである)

この本の見返しに各種の料理、果物等のデッサンが書かれ、左下に栄養失調でやせた兵隊が座り込んで肘を付き、これを眺めている絵があり、「これだけあれば病は治る」と添え書きされていた。高校時代この絵を見た時は、南方の孤島で補給が途絶して苦労された方の絵という感じで眺めていた。しかし、沖繩勤務の時に「宮古陸軍病院にて」と記載されていることを発見し、八重山諸島も非常に厳しい状況にあったことを改めて感じさせられた。

宮古島は最高点である野原岳が標高109mであり(現在空自のサイトが置かれている)、平坦な地形での防御を計画した第28師団(豊兵団)の苦労が偲ばれる。制空制海権を失った島嶼が生き延びるためにどのように苦労されたのかを改めて深刻に学ばなければなら



